

福崎町埋蔵文化財調査概要報告2

—福崎工業団地第6次地区造成工事に伴う発掘調査—

檜谷遺跡

1994年3月

兵庫県神崎郡福崎町教育委員会

あ い さ つ

福崎町は、播磨平野の中央部辺りに位置し、兵庫県下においても内陸部に位置します。ここには、自動車交通網の主要な位置を占める中国縦貫道、播但自動車道が交差する形で走ります。そのために、県下の四方に向けて人の流れをとらえることができます。そこで、昭和30年代からすでに工業団地計画が持たれ、民間資本と町との協力により開発が進んで来ました。

近年の当町の変貌は著しく、都市化の波が怒濤のように押し寄せている状況です。そのために開発も進行し、それにともない、文化財調査でも特に埋蔵文化財発掘調査が実施される傾向を見せています。

平成3年度以前には、民間開発による調査件数は無いに等しく公共事業に係わる調査が主要なものでしたが、3年度以降には民間開発に伴う調査も増加してきています。今回の榎谷遺跡の調査も民間開発である福崎工業団地第6次地区造成に伴うものです。

追跡調査は近年特に脚光を浴び、新聞紙上を賑わす状況となっています。また、地域の埋もれた歴史を知る上での重要な位置を占めてきています。この、国民の共有の財産である文化財を公開することにより、少しでも真の歴史観に近付くための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、この調査に当たりまして文化財調査にご理解・ご協力いただきました、凸版印刷株式会社・福伸電機株式会社をはじめ、多くの方々にたいして厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

福崎町教育委員会

福崎町教育長 吉 識 正 明

例 言

1. 本書は、福岡工業団地第6次地区造成工事に伴う、兵庫県神崎郡福岡町高橋字檜谷に所在する檜谷遺跡の概要報告書である。
2. 調査は、凸版印刷株式会社・福伸電機株式会社 の依頼を受け福岡町教育委員会が主体となり実施した。
3. 経費は、凸版印刷株式会社・福伸電機株式会社が負担した。
4. 現地調査期間は、以下の通りである。整理作業は、継続して行った。

福岡工業団地第6次地区造成工事地区地区内分布調査

平成4年3月1日～平成4年3月3日

福岡工業団地第6次地区造成工事地区内確認調査

平成4年7月13日～平成4年7月29日

檜谷遺跡発掘調査 平成5年10月18日～平成5年10月26日

なお、分布調査は、兵庫県教育委員会の補助金を得て実施した。

5. 調査体制は、以下の通りである。

平成3年度分布調査

調査事務局

教 育 長 後藤十郎

社会教育課長 尾内伸行

係長 志水清二

主事 出田 直

調査担当

調 査 員 出田 直

補 助 員 藤本浩司

平成4年度確認調査

調査事務局

教 育 長 後藤十郎

社会教育課長 尾内伸行

主事 出田 直

調査担当

調 査 員 出田 直

平成5年度発掘調査

調査事務局

教 育 長 吉識正明

社会教育課長 白井為次

主事 出田 直

調査担当

調 査 員 出田 直

- 整理作業は、出田 直（福岡町教育委員会）が担当した。
6. 航空写真は、兵庫スカイフォトサービスに委託した。
 7. 本書の、執筆・編集は、出田が行った。
 8. 遺構・遺物の実測、写真は出田が行い、製図は、牛尾ひろみの協力を得た。
 9. 調査・整理の実施にあたって下記の方々にご協力をいただいた。（順不同・敬称略）
藤原昭三、牛尾ひろみ、田内三枝子、松本正信、加藤史郎、本間 匡、藤本浩司、
山田正英、長沢 保、長沢貞義、古田泰裕、角 節夫、三輪正弘、笹倉重夫、
池上敷三、高井 弘、沢田義信、長谷川義信、長谷川昌一、長谷川 豊、柳田春孝
柳田春夫、柳田敏郎、佐野 勝、河島 一、田中 博、吉識 薫、埴岡稔和、
近藤 博、内藤恒治、尾内 猛、西村久雄、牛尾常夫、福岡町シルバー人材センター、
新日本土木株式会社

本文目次

あいさつ

例言

| | |
|-----------------|----|
| 第1章 福崎町の概要 | 1 |
| 1. 高橋集落周辺の地理的環境 | 1 |
| 2. 高橋集落周辺の歴史的環境 | 5 |
| 第2章 調査概要 | 8 |
| 1. 調査に至る経過 | 8 |
| 2. 分布調査・確認調査 | 10 |
| 遺構・遺物・小結 | |
| 3. 榎谷遺跡 | 12 |
| 遺構・遺物 | |
| 4. まとめ | 19 |
| 第3章 民俗資料 | 20 |
| 1. 竈について | 20 |
| 1. 竈先 | |
| 2. 竈について | |
| 3. 民俗用具 | |
| 第4章 自然科学分析 | 28 |

榎谷遺跡より採取された焼土試料の残留磁気測定結果について

花園大学自然科学研究室 前中一 晃

写真目次

| | |
|----------------|----|
| 写1. 竈 | 22 |
| 写2. 土の起き方 | 26 |
| 写3. ズンキリ使用例 | 27 |
| 写4. ズンキリ主要部(旧) | 27 |
| 写5. ズンキリ使用例 | 27 |
| 写6. ズンキリ主要部(新) | 27 |

挿 図 目 次

| | | | | | |
|-----|-------------|----|-----|--------------|----|
| 図 1 | 福崎町位置図 | 1 | 図12 | 調査場所位置図 | 12 |
| 図 2 | 高橋集落周辺地形分布図 | 2 | 図13 | 遺構位置図 | 13 |
| 図 3 | 大正8年頃の高橋周辺 | 3 | 図14 | 調査区土層図 | 14 |
| 図 4 | 昭和41年頃の高橋周辺 | 3 | 図15 | SK-01遺物出土状況図 | 15 |
| 図 5 | 昭和53年頃の高橋周辺 | 3 | 図16 | 遺構図 | 16 |
| 図 6 | 福崎町主要遺跡分布図 | 4 | 図17 | 土層サンプル採集地点 | 17 |
| 図 7 | 檜谷遺跡周辺分布図 | 7 | 図18 | SK-01炭出土状況図 | 18 |
| 図 8 | 檜谷遺跡周辺の字限図 | 8 | 図19 | 犁 先 | 21 |
| 図 9 | 明治32年の字限図 | 9 | 図20 | ズンキリ | 22 |
| 図10 | 調査区トレンチ配置図 | 10 | 図21 | 近代犁(久保式親玉號) | 25 |
| 図11 | 確認調査出土遺物 | 11 | 図22 | 近代犁(日の本號) | 25 |

図 版 目 次

| | |
|------|---------------|
| 図版 1 | 檜谷遺跡 |
| | 上 檜谷遺跡遠景 |
| | 下 檜谷遺跡全景 |
| 図版 2 | 上 遺構検出状況 |
| | 下 遺構完掘状況 |
| 図版 3 | 上 遺物出土状況(須恵器) |
| | 下 遺物出土状況(炭) |
| 図版 4 | 遺物写真 |
| 図版 5 | 民俗用具 |
| | 上 近代犁(久保式親玉號) |
| | 下 近代犁(日の本號) |

第1章 福崎町の概要

1. 高橋集落周辺の地理的環境

福崎町には、中国山地からつながる播但山地と呼ばれる山地の一員である中央山地、西播山地が存在する。播但山地は、兵庫県下最大の面積を占め、北但山地、中央山地、西播山地の3つに細分できる。

北但山地は、県の北西域の大部分を占めている山地である。中央山地は、円山川の支流の八木川を北限として山崎断層を南限とする標高500m～1000mの山地を指す。西播山地は、山崎断層の南西側に広がる標高300m～500mの山地で市川等の南流する河川により小山、丘陵群に分けられている。①

福崎町域で最高峰の七種山は、標高681mをはかり中央山地の一員である。ここは、昭和44年に名勝として県指定文化財になっており、ここには、県下八景、近畿観光百選等に選ばれている七種の滝が流れ、古くから霊場として知られているところでもある。

一般的に中央山地と西播山地の高度差は、山崎断層を境に500m程度の差があり、南側が低い様相を呈する。本町域では140m程度の高度差が知られる。②

この播但山地を源にもち福崎町域を南流する二級河川市川は福崎町を東西に2分割するかの様に流れ、その周辺には、谷底平野、河岸段丘が発達する。

谷底平野は、市川に流れ込む各小河川が関連し、ここ高橋集落周辺においても、西谷川、高橋川が流れている。前者は、活断層として知られている山崎断層に沿って東流し播但線を越えた辺りから南流し西治川と合流して市川へと注ぐ。後者は、断層が通ると推定されている谷部を南東方向へと流れ市川へと注ぐ。

河岸段丘は、市川流域や加古川流域では発達していることが良く知られ、福崎町域でも東岸に発達した状況が見受けられる。③ 西岸の高橋集落周辺には、比較的河岸段丘が見られ、少ないながらも高位面から低位面までも存在する。

また、播磨内陸部の特徴でもある、溜め池は大小合わせると250以上存在し当町でもその特徴が良く現れている。

この様な地形が当町を形成しているのである。(図2)

この様な地形上を南北の交通の要所である鉄道網の播但線が市川西岸を走り、道路網の播但自動車道が市川東岸を走り、国道312号線が東岸から西岸にかけて走る。さらに東西



図1 福崎町位置図

を中国縦貫道が走る。この様に東西南北を結ぶ交通の要所である。

この様なことから近年の当町の変貌ぶりは昔しいものがある。(図3. 4. 5) 高橋集落周辺は、町域でも都市景観形成エリアとして工業専用地域に位置付けられている。そのために、昭和30年代後半より民間と町との協力により工業団地の前身である養鶏場が建設されたが、周辺に及ぼす問題等から現在の工業団地計画へと変更になり昭和52年に工業団地として開発されるに至った。④ 今回も開発の第6次地区造成が行われようとしているのである。

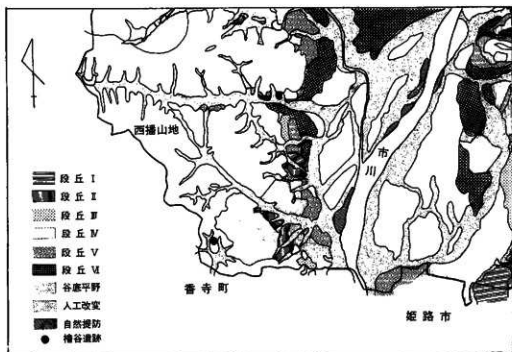


図2 高橋集落周辺地形分布図(福崎町史3巻付図Iをもとに作成)

註

1. 田中 眞吾「1. 地形区分とその性状等の概要、『土地分類図付編資料(兵庫県)』昭和49年 平成3年10月復刻 財団法人日本地図センター
2. 田中 眞吾「1. 福崎町の地形・地質図とその説明『福崎町史』第二巻資料編I 平成2年7月 福崎町史編集専門委員会編
3. 田中 眞吾「市川の河岸段丘」『広報ふくさき』No.256 昭和63年3月「市川の段丘はなぜ、東岸に多いのだろうか」『広報ふくさき』No.320 平成5年7月 福崎町広報委員会
4. 須崎 慎一「3. 経済・社会の変貌と福崎町」『福崎町史』第四巻資料編II 平成3年8月 福崎町史編集専門委員会編



図3 大正8年頃の高橋周辺 (藤原昭三氏所蔵) 1/12,500



図4 昭和41年頃の高橋周辺 1/12,500

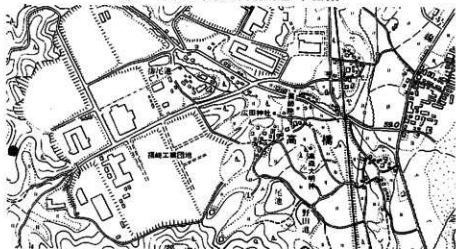


図5 昭和53年頃の高橋周辺 1/12,500



图6 福岡市主要遺跡分布图

1. 神谷遺跡
2. 穀叶古墳
3. 高橋古墳
4. 三味谷古墳
5. 南出原長目遺跡
6. 矢口遺跡
7. 林谷遺跡
8. 福田無量寺跡
9. 大塚古墳
10. 砂畑山古墳
11. 大門岡ノ下遺跡
12. 相山古墳
13. 池ノ下古墳
14. 萩池東
15. 西大貫遺跡
16. 福井谷露址
17. 森日山城址
18. 西光寺
19. 高橋城址

2. 高橋集落周辺の歴史的環境 (図6. 7)

福崎町域において最古級の遺物としては、大門桜池東部から採集された旧石器時代に属すると考えられる剥片が1点存在する。① また、旧石器時代と縄文時代との境目くらいに使用されていたと考えられている遺物に有舌尖頭器があるが、② これは、平成4年度に西光寺で地元の小中学生により採集された。この様に、断片的ではあるが当町域でも当時の人々の足跡を見ることができるのである。これらは、いずれも市川東岸にあり河岸段丘でも上位面の場所に位置するところから採集されている。

次の縄文時代の遺跡は、市川西岸の高岡の林谷遺跡 ③ で石匙等の出土の報告があったが現在それ自体の所在が不明で土器等の出土報告も無く詳細などは分からない。市川東岸では、河岸段丘の上位面に所在する南田原長目遺跡から弥生時代の石鏃に混じって縄文時代の石鏃が採集されていた。また、昭和63年度の調査によって縄文時代前期の土器が出土し、古くから人が住んでいたことが分かっている。④ 前期の遺跡としては、西大貫遺跡 ⑤ が上げられるが南田原長目遺跡よりも若干古い時期となり福崎町最古の縄文土器となる。この遺跡からは後期から晩期にかけての土器の出土もみられ長期にわたって人々が住んでいたことがうかがえる。これらの土器は縄文時代の包含層と考えられる土層から出土し、この下層からは2次堆積ではあるがアカホヤ火山灰が確認されている。残念ながら顕著な縄文時代の遺構は確認されていない。晩期の遺跡としては大門岡ノ下遺跡 ⑥ があり、ここからは住居址が1棟検出され、中からは石棒・石皿・磨り石等の石器が縄文土器と共に出土している。縄文時代の遺跡も断片的に確認されつつある。

稲作を受容した弥生時代の遺跡は中期後半以降いくつか確認されているが、⑦ 発掘調査を施したところが少なく全容などは良く分からない状況を呈している。しかし、香寺町から姫路市の北方にかけて広がる平野部分からは八幡遺跡等 ⑧ のような集落遺跡が確認されており、同様の集落の存在が考えられる。

その中で、八幡遺跡の北西に位置する南田原長目遺跡からは、環濠が確認されており環濠集落として注目される。⑨

中期前半の遺物は大門岡ノ下遺跡から出土し、中期前半の一端を垣間見る。しかしながら、前期の遺跡は確認されておらず福崎町の上流部である市川町鶴居遺跡 ⑩ ・福崎町福本遺跡 ⑪ からは出土しており、当町においても存在していたことは十分考えられ、今後の調査に期待したい。

弥生後期の遺跡は認められるものの次の時代に移る古墳時代の集落の存在はまだまだ知られていない。古墳も埴輪を持つ相山古墳 ⑫ が中期古墳として知られ、後はほとんどが後期古墳である。後期古墳の中でも市川流域でも大きい規模の石室を持つ池ノ下古墳(消滅)・妙徳山古墳・大塚古墳等があり周辺の有力量者の墓と見られている。⑬

奈良時代以降の遺跡としては東岸では7世紀末から8世紀初頭と考えられている八千種の福井谷窯址⑧があり、この北西に鰐尾を棺に転用した焼ケ横古墓⑨が存在する。西岸では福田無量寺遺跡からは古瓦の出土があり廃寺の存在が示唆されている。⑩また、高岡矢口遺跡からは平安末から鎌倉初頭にかけての土器と共に青銅製の帯金具が出土しており注目する遺跡となっている。⑪

この様な状況下、高橋集落は、市川西岸に存在し、地形的にも広い平野部を持たず、若干の河岸段丘と谷底平野や西播山地に属する山を持つ。ここにおいては、発掘調査の機会もなく今日に至り遺跡の状況は不詳なところが多く、古墳時代以降の遺跡のみが知られているにすぎない。

古墳時代には高橋古墳・三昧谷古墳の様な小規模の群集墳があり、また、数葉古墳のように単独で所在したものもある様である。⑫

高橋古墳群は6基存在する様であり昭和32年に3・4号墳が発掘され4号墳の中から鉄剣の出土を見た。共に主体部は箱式石棺であったようである。

この南方に高橋城という山城が存在するが築城年代は不詳である。城主は小川幸三蔵原秀高であると伝えられ、落城後に秀高の家臣である津田進之丞らが開発して高橋村を作ったと言う事であるが定かでない。⑬

註

1. 出田 直「大門遺跡・大門岡ノ下遺跡」平成4年3月 福崎町教育委員会
2. 「福崎町文化財だより④」平成5年8月 福崎町教育委員会・歴史民俗資料館
3. 松本 正信「2 神崎郡における縄文時代研究の概況」『福崎町史』第三巻資料編1
平成2年7月 福崎町史編集専門委員会編
4. 9、12、13、14、15、16、17、18は3と同じ
5. 「福崎町文化財だより①」平成4年4月 福崎町教育委員会・歴史民俗資料館
6. 1と同じ
7. 出田 直「福崎町内における弥生遺跡」『かたりべ』第13集 平成5年11月
かたりべ会
8. 阿久津 久ほか「播磨八幡遺跡」昭和49年3月 八幡遺跡調査会
10. 原田 和幸ほか「兵庫県埋蔵文化財調査年報」昭和62年 兵庫県教育委員会
11. 増田 重信ほか「福本遺跡調査報告書Ⅰ」昭和58年 福本遺跡発掘調査団編
15. 梅原 末治「神崎郡八千種村の特殊古墓」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』
第15編 昭和16年
19. 松岡 秀夫ほか「兵庫県の中世城館・荘園遺跡緊急調査報告書」昭和57年3月
兵庫県教育委員会



图7 高橋周辺遺跡分布図

1. 檜谷遺跡 2. 数叶古墳 3. 高橋古墳 4. 三味谷古墳 5. 佐本古墳
 6. 円光寺山古墳 7. 円光寺山西古墳 8. 三味尾群集墳 9. 釜谷遺跡 10. 片山古墳

第2章 調査概要

1. 調査に至る経過

福岡町高橋地区は都市計画上都市景観エリアとして位置付けられ工業専用区域とされている。昭和30年代後半から民間と町との協力により丸紅養鶏センターが建設されるに至る。しかし周辺に及ぼす問題等がからみ養鶏センターから現在の福岡町工業団地造成計画西への変更となり、今日まで第5次地区造成工事が実施され、今回の第6次地区造成工事の計画となったのである。①

事業主の凸版印刷株式会社、福伸電機株式会社から分布調査依頼が届けられ平成4年3月1日から平成4年3月3日にかけて分布調査を実施した。

その結果、古墳状隆起が4か所確認された。また、比較的平坦な尾根上にも遺跡の存在が推測されたので同時に確認調査を行うこととなり、平成4年7月13日から平成4年7月29日にかけて確認調査を実施した。



図8 榎谷遺跡周辺の字図

その際、尾根上にはトレンチA・B・C区を設定し行った。この内、A区から焼土と共に須恵器片が1点出上り遺跡の存在を示唆した。

確認調査終了後、樹木の伐採を行った後に焼土の範囲や性格を調査することとし、平成5年10月18日から平成5年10月26日にかけて現地調査を行うに至る。この際、遺跡名は字名を付し檜谷遺跡とした。

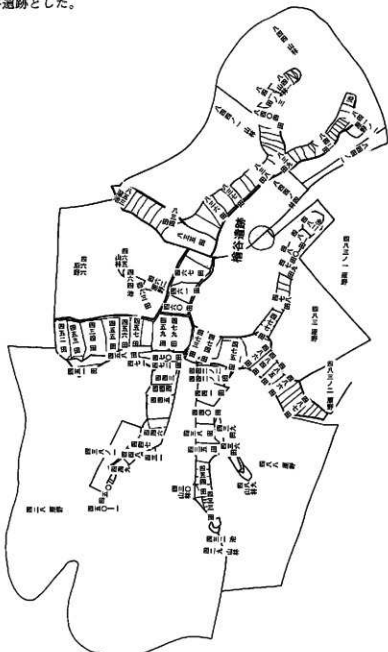


図9 明治32年の字限図

2. 分布調査・確認調査

分布調査は、古墳状隆起を4か所確認し、周辺の古墳の立地条件から見ても古墳の可能性があった。(図10)

これを受けて、尾根上や古墳状隆起周辺は作業をしやすいように樹木の伐採を行い、尾根上は、溝掘りによる確認調査を行った。尾根にはA・B・C区を設定し、表面を重機で幅1m程度を削った。その後、人力による精査をかけ遺構等の確認を行った。古墳状隆起周辺は全て人力による調査を行った。

調査区A・C区は樹木等からの落葉等により腐食土化して約10cm程度堆積していたが、それを除去するとすぐ下は明黄色粘質土・明赤茶色土の地山となっている。

A区の一部から焼土と遺物の出土があった。(図13)



図10 調査区トレンチ配置図

調査区B区は、山の谷部でもありA・C区同様の地山にいくまでには、上の堆積が認められたが基本的には地山と同様である。

古墳状隆起は一部不純物の少ないきれいな山土であったが、古墳を造ったときの盛土とは認められなかった。ほかに、植林の際に地山を整形したために起こった地形改変の跡であり、地山のみが認められた。

3. 遺構 (図12, 13)

背後の山から伸びる小さな尾根であり、緩傾斜を示す尾根である。鞍部から高まりへと続き緩やかに傾斜していく。この、高まり部分の標高109m付近のくぼむ場所の南端部分から焼土が確認された。焼土は約10cmから15cmの厚みが認められた。この中には、炭が認められる。その周辺は地山であり明黄色粘質土を呈する。

この時点では樹木が繁茂し、焼土の範囲の確定までには至らず、伐採後、調査を行うこととした。この時、焼土中より1点遺物が出土した。

4. 遺物 (図11)

調査区Aから須恵器の杯蓋の破片が出土した。復元高2.8cm復元径9.6cmとなる。胎土は良、色調は淡青灰色を呈し、焼成は堅緻である。焼土から炭が出土しておりこの土器の内面に炭の付着が見られる。これは使用時に付着したものとも考えられず、墨書的な墨の痕跡とも見受けられない。焼土中に混入されたときに付着したものと考えられる。

これは、7世紀後半頃の遺物と考えられる。

5. 小結

ここからは、1点遺物が出土したのみで、周辺には他の遺物は出土しなかったし、また、表採遺物も見られなかった。

焼土中からの出土状態から考えると古墳などの遺跡・遺構があり供献された物とはしがたく、混入された物と考えられた。そのために、この段階では周辺に遺跡の存在が示唆されるに止まった。しかし、地形的な変化も見受けられず、焼土の性格は何であるかは不明であった。

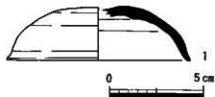


図11 確認調査出土遺物

3. 檜谷遺跡

A区の中間、尾根の高まりになる部分で確認調査の際、焼土と遺物の出土があり調査の重要性から樹木伐採後、再度発掘調査を実施した。

ここは、標高109mをはかり後部にある山から緩やかに伸びる尾根上に位置する。

調査は、焼土と遺物が出土した場所を中心に約100mを精査した。樹木伐採は切り株を残していたので、これを除去するため、重機によって試みた。しかし、根が張るために地山部分も傷める状態となり、周辺の腐食土と小さな根を削ぐだけに止めた。その後は、すべて人力による精査を行った。

精査は、焼土を中心に周辺に何かある可能性があり、遺跡の存在が考えられたためにおこなったが、結果的には、焼土以外何も認められなかった。また、焼土の広がりも確認調査を実施した場所のみに広がっていることが分かった。



図12 調査場所位置図

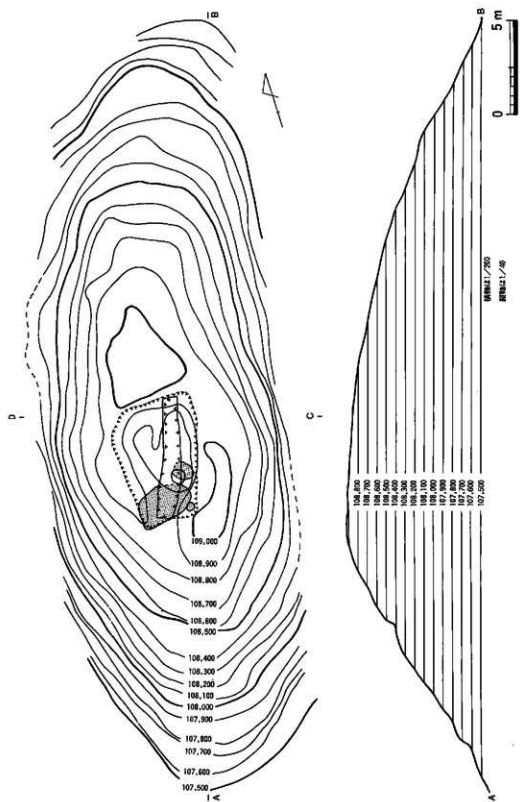


图13 堤槽位置图

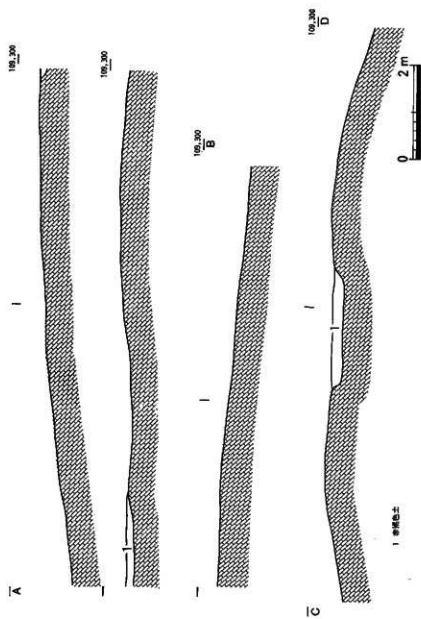


图14 调查区土层图

1. 遺構 (図15、16、18)

焼土 (SK-01) とピット (SP-02) が検出された。

SK-01は、一辺2～3m程度の隅丸三角形を呈する。深さは20cm程あり3層に分かれる。上層は暗黄茶褐色土、中間は赤褐色土(焼土)、下層は暗茶灰色土(炭混じり)を呈する。

ここからは、焼土のほかに須恵器と土師器と炭化物(炭)の出土があった。須恵器は完形だが、歪みが著しく、この東端に納めるかのようにあった。西端に樹木を焼いた際にできたと思われる炭化物(炭)が並んだ状態で出土した。土師器は細片である。

炭化物は並行に計4本認められここで焼いたままの状態と考えられる。

須恵器の出土場所の土層も3層に分かれるが、上層は暗茶色粘質土、中間は暗茶灰色土(炭混じり)、下層は暗赤褐色土(焼土)となっており、基本層序の中間と下層が逆転している。ここから、樹木を焼いた時の時間的差が認められる。まず、須恵器周辺で焼かれその後、西側で樹木が焼かれている。

(SP-02)は、直径約50cm深さ20cm程度で淡茶色土を呈する。ここには、少量の炭が認められるがSK-01ほど焼けた状況は見られない。

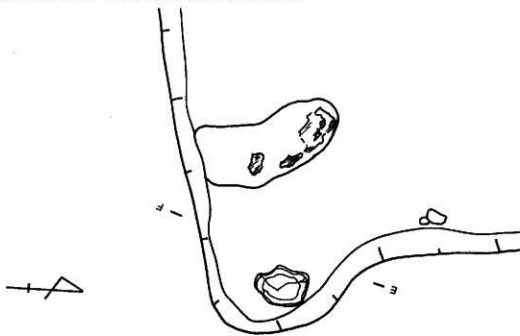


図15 SK-01遺物出土状況図

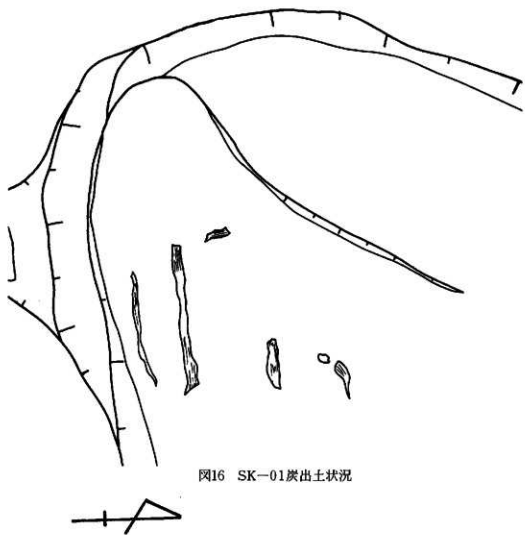


图16 SK-01炭出土状况

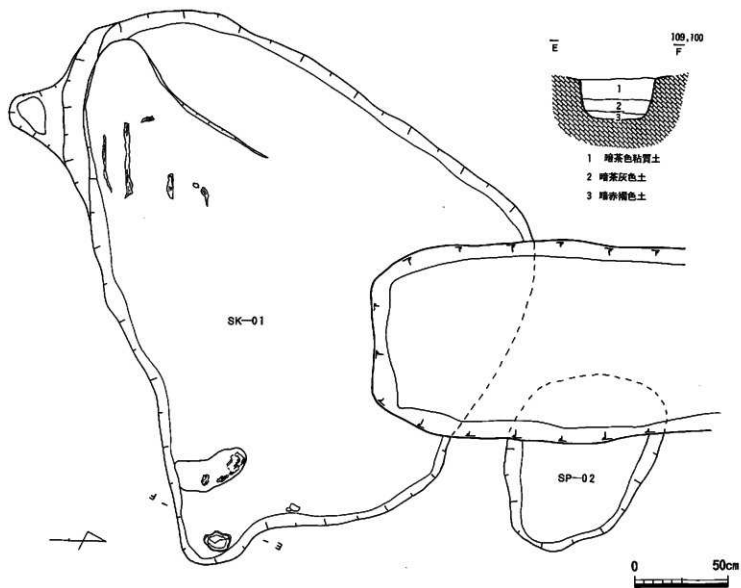


图17 遺構圖

2. 遺物

須臾器

SK-01の東端に納められるかのように出上した。

これは、杯蓋を反対に向けたような形で杯身として使用したものと考えられる。

遺物自体は、歪みが著しい。

器高は歪んでいるが約4cmあり、復元すれば約2.5～3.0cmの高さになる。口径は最大幅12.2cm最小幅9.4cmとなり、底径は約7.2cmとなる。底径から考えた口径は約10cmとなると思われる。胎土は全体的に良だが1～2mm大の砂粒を含むのが分かり1点5mm大の小石を含んでいる。焼成は堅緻であるが、焼け歪みとも取れる状況を呈する。色調は暗青灰色を呈し、この外面には自然種の付着が見られる。底部には篋切り状の跡が見られ、ロクロによるナデ調整を施す。ロクロ回転方向は右回りと考えられる。

土師器

細片で詳細は不詳。

炭化物

炭となっているが、出土状況から何等かの樹木を燃やしたものと見られ、炭の中に松ぼっくりが1点見られることから松を燃やしている可能性が高い。

しかし、樹種の同定は実施していないために不明である。

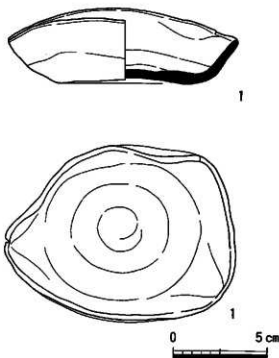


図18 SK-01出土遺物

4. まとめ

檜谷遺跡は、焼土のみであった。焼土からは遺物と炭が少量出土したに過ぎず、他は何も無かった。

須恵器の杯は埋納した様な状況で出土し、歪みが著しいものを用いている。

結果、この遺構の周辺からはこのほかには何もなく遺跡の範囲もごく限られたものとなった。この事からも、集落的な遺跡とは認め難い。埋納状の須恵器からも墓の可能性も示唆され、焼土の存在から、火をともなう祭祀的な性格の遺跡としても考えられる。

檜谷遺跡周辺には従来、遺跡は知られていなかった。既知の遺跡としては前述の高橋古墳、三味谷古墳、高橋城跡といったもののみである。地形的には、檜谷遺跡の所在する谷は、香寺町側に伸びるもので香寺町側に注目する必要があるが、隣接する溝口ニュータウン建設の際に遺跡が確認された報告を聞いていない。しかし、檜谷遺跡が存在する谷の入り口部分に三味尾群集墳といったものが存在したようであり注目される。しかし、檜谷遺跡と同時期の遺跡は確認されておらず今後、周辺に注意したい。

この様な状況下、遺跡の立地が稀薄な場所で遺跡の存在を確認できた意義は大きい。

しかし、すでに宅地・工場になり遺跡が破壊されてしまった可能性もあるが、今後周辺の調査においても注意が必要である。

最後になりましたが、この調査・整理をするに当たり協力いただいた関係者の方々には、厚くお礼申し上げます。

註

1. 須崎 慎一「3 経済・社会の変貌と福岡町」「福岡町史」第四巻資料編Ⅱ
平成3年8月 福岡町史編集専門委員会編
2. 香寺町側の遺跡については香寺町教育委員会及び松本正信氏、加藤史郎氏にご教示を得た。
松本正信ほか「法花堂2号墳」昭和61年2月 香寺町教育委員会 参照

第3章 民俗資料

1. 犁について

調査中に表採物として犁先を1点採集した。新しいものと考えられるが、犁の一例として民俗道具も合わせて紹介したい。

1. 犁先 (図19)

檜谷遺跡調査時に腐食土の中に無造作に埋まっていた状況で採集した。このすぐ下は、田になっており、耕作の際に破損したものを廃棄したものであろうか。

これは、上端の一部及び中央部裏面を破損しているが全容が分かるものである。材質は鉄で全体に錆びている。全長20cm、最大幅約20cm(残存19cm)厚さ1.5cmをはかり表面中央やや上部に穴が1か所見られる。穴の位置より2つの穴があったと思われる。

形態は、三角形の両端に角状の突起物があり三角形部分は袋状になり木部を安定させるようになっている。穴は、類例より釘を打って木部と固定させるのに使用する。

犁先に類似した形態を持つものにズンキリと呼ばれるものがあり①(図20)、まさしく犁先と同形態を示す。これは、犁先よりも若干小型で2本1対になっている。ここにも表面中央に穴が1か所あり、釘を打ち付けて木部と先を固定している。図示したものは2本1対の床部分を金属製のものと固定しているが、古いタイプのものはすべて木製で、先端のみが金属製である。②

ズンキリの床部分は犁でも長床犁③と呼ばれるものの小型版で深耕には向かないタイプで、畑等の畝上に作物を植えるための溝を入れる道具であり深耕を必要としない。

使用方法は、手前に引いて使用する。④

犁先の破損状況もズンキリと同様の破損状況を呈し、力の大小は別にしても同様の力のかかり方によって破損するようである。

ズンキリの刃先の新旧タイプを見ても若干の差異が見られ、旧タイプの先が採集された犁先と類似している。

この採集した先はズンキリよりも犁先の可能性が高いのは、若干大型であり、木部と固定する穴が2か所あるためである。これは、小さな力でする仕事のものに対しては1つ穴で固定するのに事足りるが、牛を利用して行う仕事のものに対しては1つでは弱いと考えられ2つにする必要があったと考えられるからである。

また、時期的なものとしては、ズンキリの旧タイプの使用時期が明治期であることからこの犁先も明治期に使用されたものと考えられる。⑤

使用法こそ違おうが、土を起こすという共通の目的があるがこそ類似の刃先を用いるのであろう。

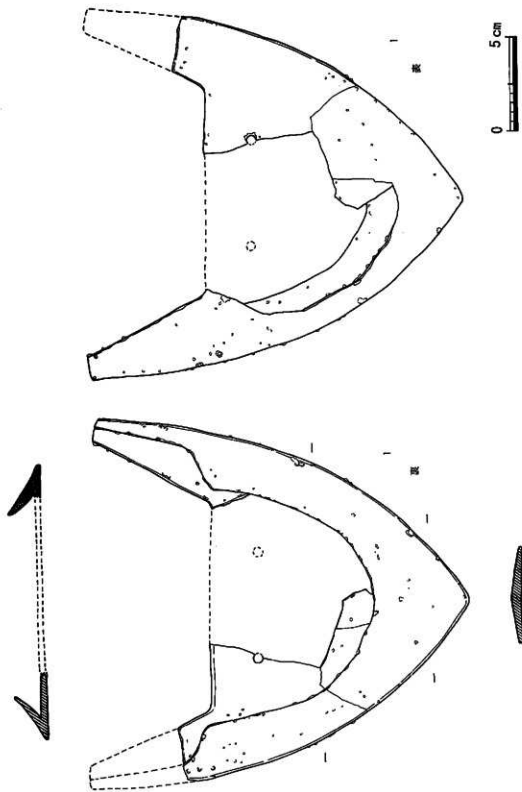


图19 犁先



写1 翠

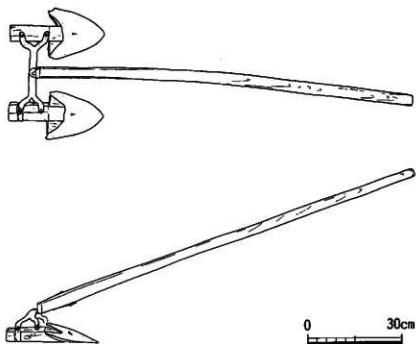


図20 ズンキリ

2. 犁について

日本に稲作が伝わり受容され普及するが、稲は旧来、租税となりわが国の経済基盤となり得たものであった。そのために、農耕に用いられる農具にも、種々改良が加わり発達してきた。

この農具の代表として、鋤・鋤・犁がある。前二者は人力で耕作し、後者は牛馬を用いて耕作する。また、鋤は土を手前へ掘り起こす道具として使用するのに対し、鋤・犁は土を掘返し向こう側にはねていく道具として使用するという点においても差異が見られる。④特に犁は畜力を利用し前進しながら使用するという点で特徴的となる。

この様な犁の出土例としては兵庫県水上郡市島町梶尾遺跡等7世紀から13世紀にかけてのものが10数例知られている。⑤他に、牛馬耕に用いられた道具としては馬鋤があるが、これは6世紀の中頃のものが最古級のものであり牛馬耕の起源は6世紀代に求められる。⑥後出する犁は確実に7世紀代から見られるものであるが、馬鋤より若干遅れて出現する。この様に、6世紀代より見られる牛馬耕は、戦後まで連続と続いた農耕手段の一つであり、欠くことのできないものとなっていった。

犁の各部分の名称は『倭名類聚抄』⑦にもみられ「加良須岐」とあり、米骨、米椽、米箭、米苾、米鎌、鋤、からできていた。一方、近世では犁の名称としては地方によって若干異なる様である。⑧近代犁では、練先、練木、犁柱、把柄、犁身、犁柄、犁床、犁先、犁鋸、耕幅調整用ハンドル、耕深調整用ナットからなり、基本的に旧来のものと同形態を示す。⑨

大きく違うのは犁床部分であり、この違いにより長床犁、無床犁、短床犁に分けられ近代犁では、犁鋸部分によっても単用、双用に分けられる。⑩

長床犁は古いタイプのもので出土例に見られるものはこのタイプである。これは、安定性に優れるが深耕には適さず浅耕ができるのである。民俗例で見たズンキも長床犁タイプに類似し浅耕するものである。⑪

無床犁は深耕に適していたが安定感には劣るものであった。これは、不安定なために抱えて使用することから別名「抱持立犁」と呼ばれている。主に九州地方で発達し明治期に東日本に広まったようであり、その後の近代犁の祖系となったものである。⑫

短床犁は深耕の調節と安定性を持ち優れた犁で、近代犁もこのタイプのものである。古いタイプの犁は、犁鋸部分が固定されている単用犁タイプであるが、近代犁には単用以外に双用タイプのものが登場する。これは、犁鋸部分又は犁体全体を動かして土を左右どちらにも反転させることができるものである。⑬

農耕において深耕することの利点は、肥料にあるようであり、深耕することによって肥料が深く行き渡り、成分を有効利用できるという事である。⑭

犁を用いた農耕は湿田には適さず乾田向きのようであり乾田化にともない広く普及していき、東日本でも溼田から乾田化することによって広まっていったようである。^⑩

この事から見ても、長床犁よりも無床犁に利点を見出し、さらに短床犁へと変化してきたことがわかり、当初の畜力を伴う農耕においては浅耕で生産され得る作物であったのが、農業形態の変化にともない生産力の向上へと結び付き、有効的かつ効果的に生産するために犁の変化をもたらしたものと考えられ、とくに肥料の発達に深く関与しているのであろう。

これら農具においても、各地域の土壌風土の差により基本的形態は踏襲しつつも、地域色を見出すようになっていったようである。この事は犁のみではなく多くのことについて言える事であり農具は土壌に強く関係することからも「鎌は半里にしてその形態が異なる」といわれるように密接に関わるものほど地域色が顕著になるのであろうか。^⑪

3. 民俗用具

犁先は、明治期に使用された物と考えられるが、その後の犁の最終段階を民俗資料で見てみたい。^⑫

図21は、兵庫県龍野市の久保農具製作所で製作されたもので製造番号三七六番とある。久保式の親玉號と呼ばれる短床犁で近代犁の一例である。全長166.8cm高さ102cmをはかり、昭和30年代中頃まで使用されていた。犁床の一部は木製であるが犁先にかけては金属製である。

図22は、日の本號で久保式の親玉號より後出のものである。久保式と基本的に同じであるが、犁先が2つになっており、犁床部分から犁先にかけて金属製である。全長156cm高さ112cmをはかる。昭和30年代後半頃まで使用されていた。

これらは共に、牛を利用して耕作していた最終段階の物でこれ以降はトラクターによる耕作が一般的となってくる。近代犁の一例となる物である。

これら犁に関しては、長谷川義信氏、三輪正弘氏をはじめ下記の方々にご協力をいただきました。記して、謝意を表す次第です。(順不同、敬称略)

長沢 保、長沢貞義、古田泰裕、角 節夫、沢田義信、長谷川昌一、長谷川 豊
柳田春孝、柳田春夫、柳田敏郎、佐野 勝

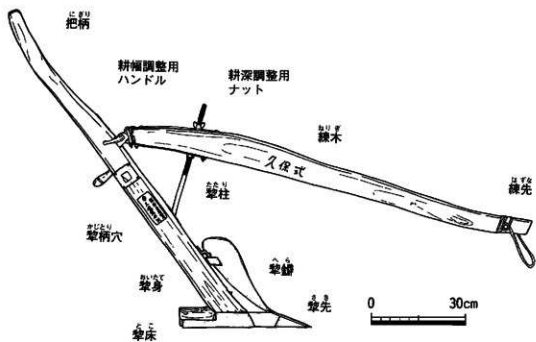


図21 近代犁 (久保式親玉號)

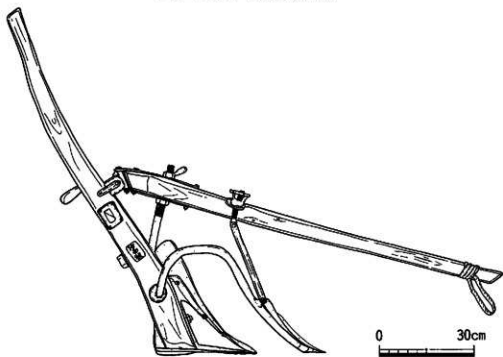
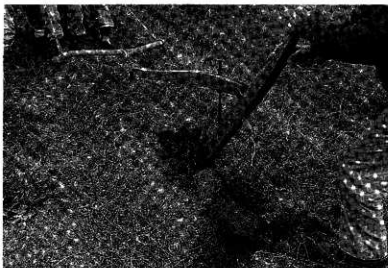


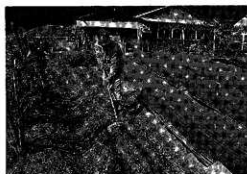
図22 近代犁 (日本の本號)

註

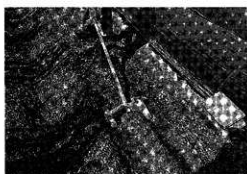
1. 長谷川義信氏「神崎郡福崎町西田原（北野地区）在住」所蔵のもの
2. 1と同じ
3. 「犁」『日本民俗文化財事典』昭和44年7月 文化庁文化財保護部 監修
4. 長谷川義信、三輪正弘氏「神崎郡福崎町東田原（大門地区）在住」に教示を得る
5. 長谷川義信氏の父の代より使用していたもの
6. 天野 武『民具のみかた一心とかたち一』昭和58年6月 第一法規出版株式会社
7. 眞野 修ほか『梶原遺跡B地区出土の犁』平成5年7月 梶原遺跡発掘調査団
兵庫考古学研究会
8. 中井 均「木製農耕具―番耕関係を中心に―」『月刊 考古学ジャーナル』No.335
平成3年7月
9. 中田祝夫編『倭名類聚抄』元和三年古活字版 二十巻本 昭和53年3月 勉誠社文庫
10. 6と同じ
11. 大島 暁雄ほか「生業とくらし―土地がらと仕事ぶり―、1. 稲作と畑作」
『図説 民俗探訪事典』昭和58年4月 山川出版社
12. 11と同じ
13. 3と同じ
14. 『日本とアジアに実った稲作文化』昭和62年3月
財団法人食生活情報サービスセンター
15. 16、17は11に同じ
18. 3に同じ
19. 三輪正弘氏所蔵の犁
三輪氏に各種
ご教示を得た。

写2 土の起き方





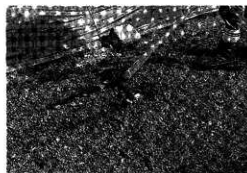
写3 ズンキリ使用例



写4 ズンキリ主要部(旧)



写5 ズンキリ使用例



写6 ズンキリ主要部(新)

第4章 自然科学分析

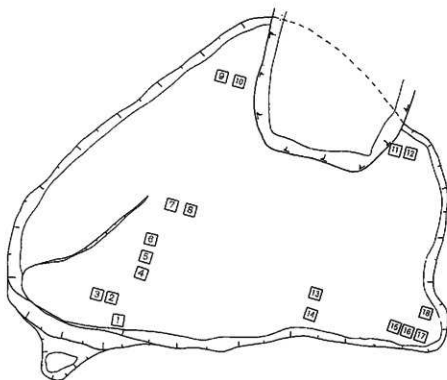
檜谷遺跡より採取された焼土試料の残留磁気測定結果について

花園大学自然科学研究室
前 中 一 晃

はじめに

福岡町教育委員会の出田直氏より考古地磁気測定依頼を受け、檜谷遺跡の焼土跡より採取された焼土試料について、その残留磁気の測定を行った。

考古地磁気測定による年代測定は焼土試料が焼成時に獲得し保存している、当時の地球磁場方向の残留磁化（初成磁化）を抽出し、その情報を過去の地磁気情報と比較して、試料の焼成を受けた試料を得ること、過去の地磁気方向を正確に復元出来るよう綿密に採取すること、信頼し得る磁化を得ていることを測定の過程で確かめることを必要とする。



第1図 考古地磁気測定試料採取箇所

試料

試料は兵庫県神崎郡福崎町高橋字檜谷に所在する檜谷遺跡の焼土跡より採取されたものである。依頼者からの報告(出田, 1994)によると、焼土は古墳状隆起をした遺跡の尾根上から確認されているが、焼土の広がりは部分的のものであるという。焼土跡は、大きな部分と小さな部分の2カ所あり、第1図に示されるように、大きな場所から14点(試料番号T1~T14)、小さな場所から4点(試料番号T15~T18)の、合計18点の試料が採取されている。

試料の測定

依頼者により採取され、送付された試料は、3.3cm立方の大きさの立方体に整形された後、「残留磁気測定装置」及び「交流消磁装置」を使ってその残留磁気の測定が行われた。試料の整形及び測定の方法は前中・笹嶋(1989)に従った、測定結果は、第1表に示す通りである。

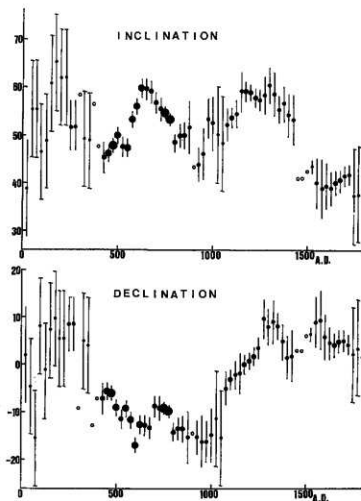
この表は、左から順に測定試料番号、自然残留磁化の磁化強度(J_r)、磁化強度に対する検対比の形で表現した測定値の標準偏差(s%)、交流消磁を施す前の磁化方向(真北からの偏りの角度を表す偏角: D、水平面からの傾きの角度を表す伏角: I)と交流消磁を施した後の磁化方向(偏角: D'、伏角: I')、およびそれぞれの測定値についてFisher(1953)の統計法によって求められた平均の磁化方向と95%誤差角(α_{95})を表している。

表での J_r の値は試料自体の強度を表しており、単位質量あたりの強度は、この値を試料の重量(約50g)で割った値となる。単純に考えて大きい値のものほど強い焼成を受けていることを表している。事実よく焼成を受けた試料は、単位質量あたり通常 10^3 emuのオーダーの強さとなるが、本表に示す試料はそれに比較するとかなり弱い値を示しており、充分な焼成を受けなかった可能性がある。

| 試料番号 | J_r ($\times 10^3$ emu) | s (%) | D (°) | I (°) | α_{95} (°) | D' (°) | I' (°) | α_{95} (°) |
|------|-------------------------------|----------|----------|----------|----------------------|-----------|-----------|----------------------|
| T-01 | 6.46 | 83 | | | | | | |
| T-02 | 1.41 | 40 | 18.4 | 48.9 | | 353.9 | 56.4 | |
| T-03 | 10.21 | 114 | | | | | | |
| T-04 | 3.03 | 64 | | | | | | |
| T-05 | 10.66 | 107 | | | | | | |
| T-06 | 15.29 | 60 | | | | | | |
| T-07 | 25.81 | 30 | 21.5 | 45.6 | | 23.8 | 36.5 | |
| T-08 | 13.81 | 40 | 335.0 | 44.5 | | 349.6 | 45.2 | |
| T-09 | 5.58 | 50 | | | | | | |
| T-10 | 0.47 | 87 | | | | | | |
| T-11 | 2.59 | 116 | | | | | | |
| T-12 | 2.52 | 44 | 279.3 | 69.4 | | 336.0 | 65.9 | |
| T-13 | 12.44 | 46 | 19.9 | 36.3 | | 10.8 | 43.0 | |
| T-14 | 26.96 | 48 | 333.6 | 24.3 | | 340.8 | 36.4 | |
| T-15 | 4.62 | 67 | | | | | | |
| T-16 | 6.23 | 71 | | | | | | |
| T-17 | 2.67 | 27 | 330.3 | 65.1 | | 331.2 | 63.8 | |
| T-18 | 8.79 | 26 | 336.9 | 14.1 | | 353.4 | 35.8 | |
| 平均 | N=8 | | 349.3 | 47.1 | 20.1 | 354.8 | 49.0 | 11.9 |

第1表 残留磁気測定結果

立方体に整形された試料は一面ずつ置き換えて、都合6回(試料に固定した座標系におけるX、Y、Z成分についていえば、各4回その大きさを)の測定を行うことになるが、試料がちゃんとした磁化を持っているかどうかを一番忠実に反映しているのが、 δ %の値である。この値が小さいほど測定値の信頼度は高いといえ、よく焼成を受けた試料では、この値が10以下に収まる。それに対し、本地域での試料はすべて30以上の値を示している。特に50以上の値を示すものは信頼できる磁化を持つてるとはいえない。従って、これらの試料(10試料を数える)については、この後の作業は停止し、残りの試料(8試料)についてのみ、交流消磁を施し、試料が焼成後に獲得した二次磁化を消去し、焼成時に獲得した初成磁化を抽出することに努めた。抽出した磁化が本当に焼成時の初成磁化に相当するものかどうかについては、Ziderveld(1967)の方法に従って確かめた。



第2図 考古地磁気経年変化曲線

年代の推定

本遺跡から採取した試料は、測定した18試料のうち半数を超える10試料が標準偏差の磁化強度に対する相対比が50%の値を越すものであり、その残留磁化強度がさして強くないことも併せて、全体としては信頼し得るデータを得られるほどの十分な焼成を受けなかったと判断される。Fisherの統計法による95%誤差角の値は、交流消磁を施すことによりかなり小さくはなったが、考古地磁気の測定で通常要請される5度以内という値よりは大きいものとなった。交流消磁後の磁化方向の平均値を、現在の京都における偏角値(西向き6.7度)で補正した値は、偏角が西向き11.9度(-11.9度)、伏角が49.0度(誤差角はいずれも11.9度)となる。この値を第2図に示す西南日本での考古地磁気研究(前中、1990)から得られた過去二千年にわたる偏角(Declination)、伏角(Inclination)の経年変化曲線と対比すると本遺跡の年代はA. D. 550年前後と求められることになる。ただし第2図から読み取れるように経年変化の変化幅は、伏角値で40度~65度の範囲にあり、伏角値が40度よりも小さい値を除外して考えると、伏角値の平均は56度となり、推定年代はA. D. 600~700年となる。

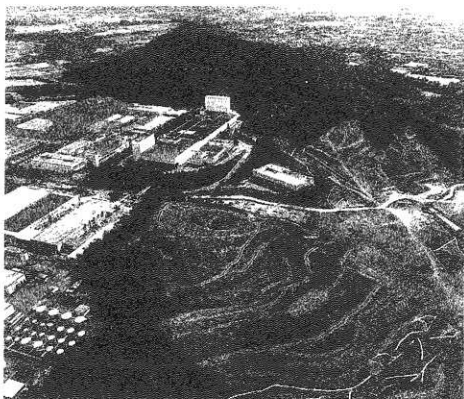
まとめ

稲谷遺跡の焼土跡より採取された焼土試料の残留磁気測定を行った。結果は試料の磁化の強さが弱いということもあり、満足すべき結果を得られたという訳ではない。最後の結論も強引過ぎる面があるが、他地域での考古地磁気測定で適用したより厳密な採用テストを本地域の試料に当てはめるとき適用できる試料は、実はT-01の試料ただ一つであるという事実を照らし合わせてみたとときそうおかしくない結論だと言えるかもしれない。あくまで一つの参考意見として斟酌していただきたい。

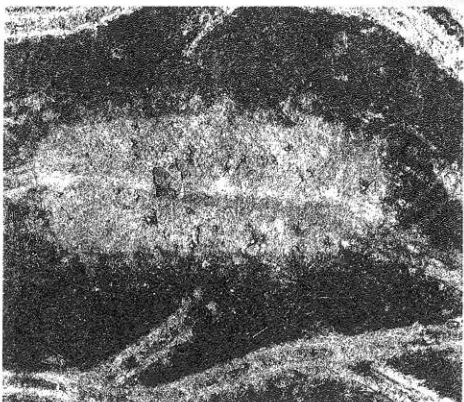
参考文献

- Fisher, R. F. (1953) : Dispersion on a sphere, Proc. R. Soc. Lond.,
A217, 295~305.
- 出田 直 (1994) : 私信
- 前中一晃 (1990) : 考古地磁気年代測定と永年変化曲線、花園大学研究紀要、
第21号、51~74.
- 前中一晃・笹嶋貞雄 (1989) : 考古地磁気年代推定、花園大学研究紀要、
第20号、21~50.
- Zijderveld, J.D.A (1967) : A.C. demagnetization of rocks, "Method
in Paleomagnetism", 254~286.

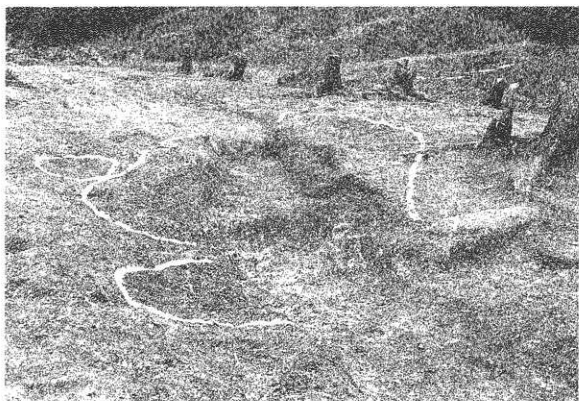
写 真 图 版



楡谷遺跡遠景



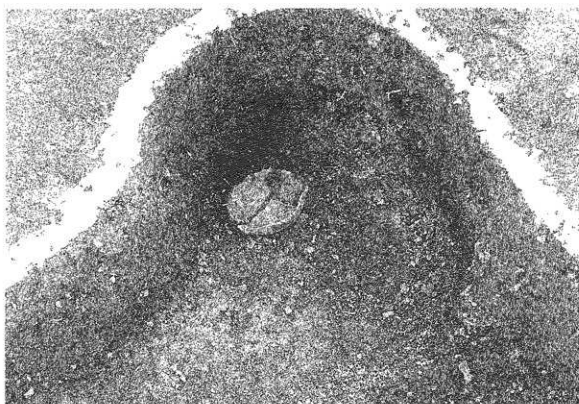
楡谷遺跡全景



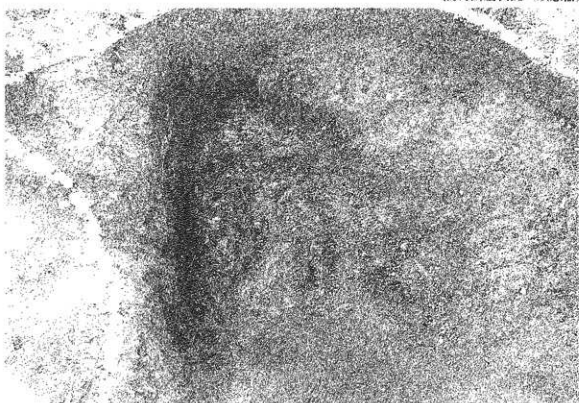
遺構検出状況



遺構完掘状況



遺物出土状況（須恵器）



遺物出土状況（炭）



SK-01出土遺物（上から）



SK-01出土遺物（横から）



確認調査出土遺物（表）



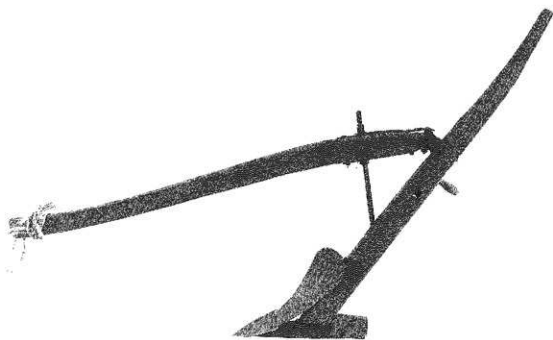
確認調査出土遺物（裏）



壺（表）



壺（裏）



近代犁 (久保式親玉號)



近代犁 (日の本號)

報告書抄録

| ふりがな | ウツミイビ | | | | | | | |
|-------------|---|-------|---------|-------------------|--------------------|-----------------------|-----------|-------------------------------------|
| 遺 名 | 楡谷遺跡 | | | | | | | |
| 図 書 名 | 福岡工業団地第6次地区造成に係わる発掘調査 | | | | | | | |
| 巻 次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 福岡町埋蔵文化財発掘調査概要報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 2 | | | | | | | |
| 編 著 者 名 | 出田 直 | | | | | | | |
| 編 集 機 関 | 福岡町教育委員会 | | | | | | | |
| 所 在 地 | 〒679-22 兵庫県神崎郡福岡町南田原3116-1 TEL.0790-22-0560 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 1994年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コ ー ド | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 ㎡ | 調 査 原 因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | … | … | | | |
| ウツミイビ 楡谷 | ウツミイビ 兵庫県神崎郡 福岡町 高橋字楡谷 | 28443 | | 34度 56分 20秒 | 134度 44分 06秒 | 19931018- 19931026 | 100 | 福岡工業団地 第6次地区造成 工事に先立つ 事前調査 |
| 所収遺跡名 | 種 別 | 主な時代 | 主 な 遺 構 | 主 な 遺 物 | | 特 記 事 項 | | |
| 楡谷 | 祭祀 | 古墳 | 焼土層 | 須恵器・土師器 | | 焼土層のみ検出された | | |

福崎町埋蔵文化財調査概要報告2

檜谷遺跡

1994年3月

編集・発行 福崎町教育委員会
神崎郡福崎町南田原3116-1
TEL.0790-22-0560

印刷 中井綜合印刷株式会社